

連日の委員会及びWT、運営委員会等の采配、たいへんお疲れ様です。
先日、事務局から資料として提出されました、「新規ダム建設による環境への影響検討」に関する意見書を提出しますのでよろしくお願ひ申し上げます。

2006/06/21
流域委員会委員
田村博美

意見書

まず、これまでに議論され決定された大前提として、新規ダムを少なくとも河川整備計画では位置づけられないことを明確にした上で、以下の点について意見書を提出します。

(1) 武庫川峡谷の広域的な位置づけについての分析評価と位置づけの明確化が必要

新規ダムについて環境への影響検討を行うにあたり、武庫川峡谷の位置する場所およびその役割等に関する資料や分析データがないことは遺憾です。巨大な構造物であり、公共事業が行われようとする場所に関する分析評価、位置づけ等をマクロの視点から行い、流域住民に明確に説明する必要があります。

とくに武庫川峡谷のように、大都市市街地に近接するような渓谷の持つ役割と期待の大きさを明確に評価すべきです。

阪神間住民を含め約 200 万人の奥座敷として重要な場所であること、都市住民にとって近接の癒しの場、レクリエーションの場、自然との交流の場である。

また、峡谷に年間どこからどのような人々が訪れ、どのような目的で入り込み、どんな活動をしているのか、さらに武庫川峡谷に対してどのような評価をしているのか等、今後の検討に当たり必要なデータが殆ど無いことも問題である。

広域阪神間都市および近畿圏の都市構造的にも重要な骨格的緑地ゾーンに位置し、かつ西と東、および北ゾーンは、それぞれ瀬戸内海国立公園、明治の森箕面国立公園、猪名川渓谷県立自然公園等に指定されている。また、武庫川峡谷を含めて近畿圏整備法による近郊緑地保全区域（北摂連山）（六甲）と一部近郊緑地特別保全地区（良元・生瀬）が指定されている。

今後、適切な評価に基づき自然公園指定等も必要である。

近畿圏、首都圏等で類似の峡谷がどのような評価と位置づけをされ、これに基づくどのような法指定がされているか等の比較調査も重要である。

(2) 武庫川峡谷の景観的分析評価について

事務局が提出した資料で見ると、「景観」という評価項目を非常に狭義に捉えている。周辺の主要視点場から見た新規ダムの堰堤の見え方のみで分析評価し、対応策を出している。

このような評価で武庫川峡谷の景観が分析され、問題は少ない等と評価されるとどのような施設でも立地可能になってしまう。

「景観」はもっと広義の内容を含むし、もっと奥深い「風景」や「文化景観」として捉えることも重

要である。人と峡谷の長い付き合いのなかで培われた「文化景観」という捉え方と単に物理的景観ではない「心象風景」としての評価など多様な視点で分析評価することが必要である。

地域の人々と武庫川峡谷、武田尾溪谷のこれまでの密接なつながりや歴史を、文化的景観や心象風景といった視点で理解し、評価することにより自然環境や自然景観の評価に加えた総合的評価が可能となる。

武庫川峡谷は、地域にとってそれほど重い資源であり資産であることを十分理解したうえでさまざまな調査分析、評価、計画を行うことが重要である。

具体的に説明すると、武庫川峡谷は、自然景観が素晴らしいということだけでなく、溪谷の「高座岩」「十次郎ヶ淵」「十国の瀬」などさまざまな伝説や伝承も蓄積された「文化的景観」群であることを理解すべきである。

例えば、「高座岩」には、{ 早魃ならば、雨乞いを執行する場所たり。---その儀式は動物の生き血をこの岩に塗るにあり。しからば天、その汚れを洗い去らんが為に雨を降らすという。--- } という言い伝えがある。「十次郎ヶ淵（別名 鯰が淵）には、{ 宝暦 11 年、名塩村教行寺本堂落成にかかわる材木が武庫川を流して運ばれていた。一本の大木が瀬に引っかかり淵に沈んだ。村民十次郎が飛び込み、これを浮かびあがらせたが、自らは川に沈んだまま不帰の人となった。人々はその名を後世に淵の名として残した。} このように人々と武庫川のさまざまな歴史が自然資源を文化資源に醸成させ今日に至っている。

これらの資源と資産が消滅することの重要性を再認識する必要がある。

ちなみに徳島県の“あわ文化”における文化振興の基本方針では、「農林漁村風景や里山、吉野川等の歴史・自然的文化景観などの風土景観や心象風景を大切に保存整備します。」とあり、景観を文化的なものとしても捉えることが今や常識になっている。

(3) 武庫川峡谷の自然景観の変化に関する分析評価について

資料ではほとんど触れられていないが、武庫川峡谷景観と風景の重要な要素として、溪流景観、斜面緑地景観、山のスカイラインと空に分けられる。

どれも要素として重要であるためそれぞれの要素景観をどのように保全するかという視点と合わせ、複合した全体景観としての評価分析および保全策も必要である。

多様な自然地形と広がりがあるため、見る人との距離により、近景、中景、遠景といった視点での分析も必要である。

とくに溪谷の自然斜面緑地の保全が重要である。四季折々の季節感や移ろいの妙は殆ど溪谷斜面の樹林や緑地、草花が醸し出している。試験湛水や洪水時湛水により植物への影響がないか、さらに斜面崩壊や土砂崩れ等の発生が無いかなども十分検討される必要がある。